

晩ご飯をどうする

－ 食事準備の簡略化と「食の外部化」 －

渡瀬 典子

(東京学芸大学)

【要旨】

本研究は「平日の夕食時に家族の誰も調理をしないこと」を「食の外部化」の現れ的一端と捉え、「食の外部化」の頻度に影響を与える事柄について、日本家族社会学会 NFRJ 研究会が実施した「第4回 家族についての全国調査 (NFRJ18)」の調査票から検討する。

分析の結果、以下の事柄が明らかになった。①就業と「食の外部化」状況について女性のみ統計的関連が現れた。②夕食時に家庭調理をしない「食の外部化」を選択する頻度は、男女共に加齢に従って低くなる傾向にあり、年齢差が認められた。③健康状態と「夕食の調理をしないこと」との関連を見たところ、女性のみ統計的関連が見られた。④「家庭調理をしない」という選択は、「外食・中食をすること」の価値意識が関わると推察されるので、この点において今後検証が必要である。

キーワード： 食事準備の簡略化、調理時間の短縮化、外部化志向、家庭調理

1. 研究の背景と目的

農水省の「我が国の食料消費の将来推計 (2019年版)」では、2040年の食料支出額について、現在と比べて単身世帯で「外食費」が減少する一方、中食等で利用される「加工食品」への1人当たり食料支出額が大幅に伸びることを予想している(八木 2020)。「何を」「どのように」「誰と」食べるかは、時代背景や生活価値、ライフスタイル選択を映し出すものである。谷田沢他は「食生活のプロセス」として家庭調理による「家庭内食」から学校・職場・給食など家族員以外と食事をする場合の「外食」まで7段階を提示し、食事準備と喫食との関係性を示した(谷田沢ほか 1985)。現在は、「食事準備の簡略化」が進行する状況にあり、料理の連載レシピ記事にも「家庭内食」における調理の時短化傾向が現れている(渡瀬 2021)。この「食事の準備を簡略化する段階」には、大きく3つの段階(①家庭調理の簡略化：調理工程、使用食材の工夫による調理時間の短縮化、②家庭調理の分担化、③外食、出前、市販の弁当、即席食品の利用等の「食の外部化」)がある。

農水省(2020)は、「食の外部化」について「共働き世帯や単身世帯の増加、高齢化の進行、生活スタイルの多様化等を背景に、家庭内で行われていた調理や食事を家庭外に依存する

状況が見られる。これに伴い、食品産業においても、食料消費形態の変化に対応した調理食品、総菜、弁当といった『中食』の提供や市場開拓等に進展が見られている。こういった動向を総称して『食の外部化』という」と説明している。また、長谷部、草苺は「調理済み食品(そうざいや持ち帰り弁当など)や外食が、家庭調理による食事に代替すること」と述べている(長谷部・草苺 2007)。そこで、本研究は「家庭調理ではなく、外食、出前、市販の弁当、即席食品などで済ませること」を「食の外部化」の状況と捉える。

永井(2014)は、平成期においてとくに「炊事、掃除」等について「外部化」が進行したと指摘している。コーンリッチとロバーツによるアメリカの消費支出調査(1980-2010年)を基にした分析でも、食の外部化の進行が指摘されている(Kornrich&Roberts 2018)。また、オランダにおける調査にも食事の準備に関連する外部委託の支出平均額が最も高いことが報告されている(Cornelisse-Vermaat&Ophem 2013)。

それでは、「平日の夕食で家庭調理をしない」という選択は何によって決定されるのだろうか。先述した「食事の準備を簡略化する段階」で「①家庭調理の簡略化と②家庭調理の分担化」では「家庭調理」することが前提になっている。一方で、「家庭調理」をしない選択=③外食、出前、市販の弁当、即席食品の利用等の「食の外部化」には積極的選択の側面(外食、出前、市販の弁当、即席食品の新奇性、味わい、ごみ処理・喫食上の簡便性など)と消極的選択の側面(調理をする時間がない、疲労・健康上の理由で調理したくない、調理設備・調理技術がない等)がある。

牛窪(2019)は夫婦を対象にした夕食調理に関する調査の中で、夫と妻の「資源」と「愛情」との関係から各々の調理意欲/実態、外部化志向について分析をしているが、意識と実態との間に関連がなかったことを報告している。共働き化、小家族化に伴う「食の外部化」の進行は、家庭で食事をとる場合でも、調理済みの食品、加工食品の利用等、調理の時間が縮減される傾向にあると推察されるが、キルワルドは女性が調理等を外部化することは家事時間を減らすことに若干寄与する程度と捉えている(Killewald 2011)。

2. 分析仮説と先行研究

本研究は、「食事の準備を簡略化する段階：③外食、出前、市販の弁当、即席食品の利用等」の「食の外部化」について、NFRJ18調査から、平日の夕食の状況を見ていく。モーガンは「人間の活動でもっとも基本的なこと、すなわち、食物の用意と食物の消費に関する問題は、ケアの問題と密接に関連しており、そしておなじようにジェンダー化されている」と捉えた(モーガン 2017)。

日本では女性の家事労働時間が短縮化傾向にあることが報告されており(総務省 2018、等)、アメリカ等の西欧諸国でも同様の傾向が見られるが、「女性の就業がどのような状況(有業/無業、フルタイム/パートタイム)でも、就業する男性よりも調理、掃除、計画・管理などの精神労働」についてかなり多くの時間を費やしていることを挙げ、家事労働の

ジェンダー差が存在することを改めて指摘している（Jenkins&Gerstel 2020）。

岩間は家事労働における男性の参加の規定要因に関する主な仮説（相対的資源説、時間制約説、イデオロギー／性役割説、代替的マンパワー説、ニーズ説）を検証した結果、シェルトンとジョン（1996）の「時間制約説：時間的余裕がなくなるほど家事をしない」、稲葉（1998）の「イデオロギー／性役割説：性別役割分業を肯定する価値観をもつほど家事をしない」、代替的マンパワー説「家族の中で夫以外に家事を担う人がいると家事をしない」が支持されたと報告している（岩間 2015）。「時間制約説」に関連する先行研究として、「夕食を作る回数は、働いている女性の方が働いていない女性に比べ少なく、フルタイムの場合はその傾向がより明確」という報告（石田他 2015）や、首都圏在住の女性を対象にした調査結果では、就業時間が長いことで外食や中食の利用が増えるという研究がある（山本他 2018）。以上の先行研究から、平日の夕食における「食の外部化」頻度について、男女別モデルを設定し、「仮説 1：就業していることで平日の夕食に家庭調理をしない「食の外部化」頻度が高まる」を立てた。

次に、「食の外部化」と「年齢」に関連する先行研究について見ていく。関東地区に住む、各世帯における主買物担当者（女性）対象の調査によれば、「年齢が外食頻度に負の影響を及ぼす」とされ（八木ほか 2020）、他国で実施された調査でも同様の結果が明らかになっている（Craig、et.al 2016 等）。また、様々な先行研究の調査から、若年層が手早く調理を済ませたいと考えていることが報告されている（クリナップ 2019; 村田他 2016）。これらの先行研究を踏まえ、「仮説 2：年齢が低い人ほど、平日の夕食は家庭調理をしない選択をする頻度が高まる」を設定した。

そして仮説 3 として、「自分の健康状態が悪いと捉えている場合や生活満足度が低い人ほど、平日の夕食は家庭調理をしない頻度が高まる」を設定した。先述したオランダの調査では、自己申告による「健康状態の評価」と家事労働の外部化関連の支出額増には関連がない、と報告されているが（Cornelisse-Vermaat&Ophem 2013）、岸田他による女子大学生を対象にした調査では、外食や中食利用の頻度が高い場合、「疲労自覚症状」があり、健康習慣が身につけていないことが指摘されている（岸田他 2006）。この結果は、「食の外部化」が健康状態の悪さを招く、ということの意味するが、前項で挙げた「家庭調理」をしない「消極的選択の側面：疲労・健康上の理由で調理したくない」ということが推察されることから、仮説 3 を検証することにした。

20 - 40 代の有職男性を対象にした調査では、既婚、複数同居者がいる場合、中食・外食利用が少ないことが報告されている（續他 2009）。Schulz はドイツの生活時間調査から、世帯内に女性の構成員（妻・子ども）が複数いる場合、家事時間が長くなることを指摘している。以上の研究等から、「家事の担い手が自分以外に複数存在する場合は「食の外部化」頻度は低い」という仮説 4 を設定した。

3. 分析方法

3.1 分析の概要

先述した研究目的を踏まえ、本研究では平日の夕食に「家庭調理をしない」⇔「食の外部化」頻度に影響を与える事柄について、仮説を設定し、検証する。検討にあたり、日本家族社会学会全国家族調査委員会が実施した NFRJ18 調査の調査票を用いて分析する。

3.2 使用データ

「家族についての全国調査」(National Family Research of Japan: NFRJ) は、日本家族社会学会全国家族調査委員会が 1999 年から縦断的に実施している全国規模の家族調査である。「第 4 回 家族についての全国調査 (以降、NFRJ18 と記載)」は 2018 年 12 月 31 日現在、満 28~72 歳の男女個人を対象に、層化 2 段無作為抽出法でサンプリングされ、2019 年 1 月~4 月に調査が行われた。調査方法は訪問留置法と郵送法の併用である。調査対象者数は 5,500 人、有効回収数 3,033 件 (有効回収率 55.2%) で、本研究ではそのうち「女性」の回答 1,602 件の中で対象データ内に欠損値を含まない 1,510 件、「男性」の回答 1,442 件の中で対象データ内に欠損値を含まない 1,352 件、計 2,862 件を分析に用いる。性別でモデルを変えたのは、先行研究等を踏まえ、「食の外部化」志向に性差があると推定したからである。

3.3 変数

先述した仮説 1~4 を検証するために、本研究では従属変数に設問「平日の夕食を家族の誰も調理しないこと (外食・出前・市販の弁当・即席食品などですませる)」の回答 (1.よくある、2.時々ある、3.ほとんどない、4.まったくない) を設定し、順序ロジスティック回帰分析を行う (以降、この設問を「食の外部化」項目と記載する)。順序ロジスティック回帰分析を用いるのは、従属変数が順序性を持つ回答項目であること、質的変数に対する要因の影響力を見るうえで有効だと捉えたからである。

投入した独立変数は、仮説 1 に直接的に関わる変数として「就業状況 (収入を伴う仕事に) 1. ついている / 2. (現在) ついていない / していない」を設定した。NFRJ18 調査では、当該設問の選択肢として、「ついているが休職中 / 今はついていないが過去についていた / 仕事についたことはない」が設けられていたが、これらの回答を全て「2. (現在) ついていない / していない」にまとめた。回答をまとめた理由は、生活時間における就業関連時間の有無が仮説 1 の検証において大いに関わると捉えたからである。仮説 1 に関連する変数として、他には「家計の状態 (1.かなりゆとりがある / 2.どちらかといえばゆとりがある / 3.どちらかといえば苦しい / 4.かなり苦しい)」を置いた。仮説 2 に関わる変数は「年齢」、仮説 3 に関わる変数は「健康状態 (1.たいへん良好 / 2.まあ良好 / 3.どちらともいえない / 4.やや悪い / 5.たいへん悪い)」、「生活全体の満足度 (1.かなり満足 / 2.どちらかと

いけば満足／3.どちらかといけば不満／4.かなり不満)」を設定した。仮説4に関わる変数として、「婚姻状態」に関する設問は調査票では4段階で構成されていたが、(1.現在配偶者がいる／2.現在配偶者がいない)の2つに集約した。なお、「2.現在配偶者がいない」は、NFRJ18調査における当該設問の選択肢「離別した／死別した／結婚したことはない」の回答を合わせて処理した。他に「あなたとあなたの配偶者以外に誰か家事をしてくれる人(1.大半をしてくれる人がいる／2.一部をしてくれる人がいる／3.そのような人はいない)」、「家事の頻度(食事の用意、食事の後片付け、食料品や日用品の買い物：1.ほぼ毎日／2.1週間に4～5回／3.1週間に2～3回／4.週に1回くらい／5.ほとんど行わない)」を関連する変数として捉えた。なお、投入した独立変数は多重共線性を相関行列で確認し、相関係数0.7未満とした。分析にはエクセル統計を用いた。

4. 研究結果

4.1 調査対象者の基本属性と「食の外部化」状況

「食の外部化」の状況についてNFRJ18調査から検討する。表1は「食の外部化」項目と捉えた「平日の夕食を家族の誰も調理しないこと(外食・出前・市販の弁当・即席食品などですませる)」の回答(1.よくある、2.時々ある、3.ほとんどない、4.まったくない)について、回答分類ごとの各独立変数の平均値と標準偏差(SD)を示している。「食の外部化」項目で男女とも最も多く回答されたのは「ほとんどない(34.8%)」で、「まったくないと合わせると6割以上を占める。

表1 対象者の基本属性と「食の外部化」の状況

(女性)	「平日の夕食を家族の誰も調理しないこと(外食・出前・市販の弁当・即席食品などですませる)」									
	よくある (n=62)		時々ある (n=502)		ほとんどない (n=526)		まったくない (n=420)		合計 (n=1,510)	
変数(回答範囲)	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
年齢(28-72)	45.613	11.475	49.189	12.050	51.574	12.556	53.710	12.594	51.130	12.524
就業状況(1-2)	1.177	0.385	1.319	0.466	1.344	0.476	1.386	0.487	1.340	0.474
婚姻状態(1-2)	1.500	0.504	1.259	0.439	1.202	0.402	1.252	0.435	1.247	0.431
家事の頻度:食事の用意(1-5)	2.403	1.465	1.418	0.931	1.437	1.086	1.486	1.136	1.484	1.086
家事の頻度:食事の後片付け(＃)	2.339	1.546	1.394	0.900	1.348	0.915	1.376	0.970	1.412	0.977
家事の頻度:食料品や日用品の買い物(＃)	2.903	1.289	2.289	1.183	2.325	1.193	2.357	1.271	2.346	1.220
あなたと配偶者以外に家事をしてくれる人の有無(1-3)	2.629	0.659	2.590	0.647	2.565	0.695	2.579	0.735	2.579	0.689
家計の状態(1-4)	2.548	0.659	2.538	0.673	2.517	0.664	2.540	0.698	2.532	0.686
健康状態(1-5)	2.629	1.059	2.396	0.924	2.323	0.870	2.340	0.893	2.365	0.904
生活全体の満足度(1-4)	2.242	0.803	2.125	0.621	2.082	0.604	2.164	0.662	2.126	0.636

(男性)	「平日の夕食を家族の誰も調理しないこと(外食・出前・市販の弁当・即席食品などですませる)」									
	よくある (n=93)		時々ある (n=422)		ほとんどない (n=471)		まったくない (n=366)		合計 (n=1,352)	
変数(回答範囲)	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
年齢(28-72)	48.280	12.389	49.600	12.521	52.673	12.084	52.863	12.530	51.463	12.464
就業状況(1-2)	1.140	0.349	1.121	0.326	1.161	0.368	1.131	0.338	1.139	0.346
婚姻状態(1-2)	1.591	0.494	1.251	0.434	1.231	0.422	1.246	0.431	1.266	0.442
家事の頻度:食事の用意(1-5)	3.118	1.706	3.806	1.505	4.032	1.393	4.161	1.368	3.933	1.468
家事の頻度:食事の後片付け(＃)	2.817	1.648	3.287	1.579	3.456	1.530	3.689	1.579	3.422	1.582
家事の頻度:食料品や日用品の買い物(＃)	2.903	1.368	3.659	1.173	3.917	1.078	3.967	1.165	3.780	1.183
あなたと配偶者以外に家事をしてくれる人の有無(1-3)	2.742	0.606	2.578	0.704	2.484	0.760	2.516	0.796	2.540	0.746
家計の状態(1-4)	2.548	0.925	2.578	0.684	2.597	0.680	2.607	0.705	2.592	0.707
健康状態(1-5)	2.629	1.156	2.289	0.892	2.382	0.869	2.251	0.961	2.329	0.926
生活全体の満足度(1-4)	2.376	0.793	2.121	0.648	2.125	0.638	2.066	0.687	2.125	0.670

また、「よくある」と「まったくない」の状況を見ると、「よくある」と回答した群の平均年齢は最も若かった（女性 45.6 歳、男性 48.3 歳）。反対に「まったくない」の平均年齢が最も高く、女性 53.7 歳、男性 52.9 歳だった。同項目の標準偏差（SD）をみると、最もばらつきが少ないのが「よくある」の回答だった。女性の回答における「よくある」の回答群について、食事に関する「家事の頻度」3 項目をみると、ほかの回答群よりも家事の実施頻度が明らかに低い（＝平均点の点数が大きい）ことがわかる。

4.2 「食の外部化」を促す要因

次に、「分析方法」の項目で述べた変数を用いて順序ロジスティック回帰分析を行った（表 2）。表 2 に示すように、偏回帰係数の有意性検定の結果、女性では「食の外部化」と「年齢」（ $\rho < .001$ ）、「健康状態」（ $\rho < .005$ ）、「就業状況」、「家事の頻度（食事の後片付け）」（ $\rho < .05$ ）は、統計的に有意だった。また、これらの変数のうち、「年齢」、「就業状況」の偏回帰係数が正であることから、高齢の人や現在収入を伴う仕事に就いていない人のほうが「平日の夕食を家族の誰も調理しないこと（外出・出前・市販の弁当・即席食品などで済ませる）」頻度が低い＝自分もしくは家族員のうち誰かが家庭調理する機会が多い、という結果だった。また、「健康状態」と「家事の頻度（食事の後片付け）」の偏回帰係数が負だったことから、自分の「この 1 年間の健康状態」について「悪い」と感じている人や、食事の後片付けをあまりしない人は、平日の夕食は外出・出前・市販の弁当・即席食品などで済ませる傾向が明らかになった。一方で、「食事の用意」や「食料品や日用品の買い物」などの「家事の頻度」は平日の夕食における「食の外部化」について統計的な関連が認められなかった。ほかにも「婚姻状態（配偶者の有無）」、主観的な「生活全体の満足度」についても統計的に関連がなかった。よって、女性は仮説 1、2、さらに仮説 3 の一部について仮説が支持された。疑似決定係数（Nagelkerke $R^2=0.0442$ ）は低いものの、モデルに定数項のみを含む場合の-2 対数尤度と、モデルに定数項と独立変数を含む場合の-2 対数尤度の差を用いた尤度比検定を行った結果、このモデルは有意と考えられる（ $\rho < .001$ ）。

次に男性の回答では、偏回帰係数の有意性検定の結果、「年齢」、「家事の頻度（食料品や日用品の買い物）」、「あなたと配偶者以外に家事をする人の有無」（ $\rho < .001$ ）、「家計の状態」（ $\rho < .01$ ）、「生活全体の満足度」（ $\rho < .05$ ）は有意という結果だった。男性の回答の特徴として「食料品や日用品の買物をよくする」場合や、家事の担い手が複数いない場合は、夕食を中食・外食で済ませていることがうかがわれる。以上のことから男性は仮説 2 と仮説 3・仮説 4 の一部について仮説が支持された。また、男性の調査結果から、「就業状況」、「婚姻状態（配偶者の有無）」、「健康状態」には統計的な関連が見られなかった。

男性に関するモデルも疑似決定係数（Nagelkerke $R^2=0.0830$ ）は低かったが、モデルに定数項のみを含む場合の-2 対数尤度と、モデルに定数項と独立変数を含む場合の-2 対数尤度の差を用いた尤度比検定を行った結果（ $\rho < .001$ ）、このモデルは有意と推定される。なお、

男女ともに統計的に有意だった変数は「年齢」($\rho < .001$)のみだった。

表2 「食の外部化」の状況を従属変数とする順序ロジスティック回帰分析

女性(n=1,510)		偏回帰係数の95%信頼区間			オッズ比の95%信頼区間			p値
変数	偏回帰係数	標準誤差	下限値	上限値	オッズ比	下限値	上限値	
年齢	0.0236	0.0035	0.0167	0.0306	1.0239	1.0168	1.0310	$P < 0.001$ ***
就業状況	0.2068	0.1013	0.0083	0.4053	1.2298	1.0084	1.4998	0.0411 *
婚姻状態	-0.2162	0.1196	-0.4506	0.0182	0.8056	0.6373	1.0183	0.0706
家事の頻度(食事の用意)	0.1248	0.0689	-0.0102	0.2599	1.1330	0.9898	1.2968	0.0700
家事の頻度(食事の後片付け)	-0.1729	0.0703	-0.3106	-0.0351	0.8412	0.7330	0.9655	0.0139 *
家事の頻度(食料品や日用品の買い物)	0.0263	0.0456	-0.0631	0.1158	1.0267	0.9388	1.1227	0.5642
家計の状態	0.0627	0.0746	-0.0835	0.2089	1.0647	0.9199	1.2324	0.4003
健康状態	-0.1682	0.0588	-0.2835	-0.0528	0.8452	0.7531	0.9485	0.0043 **
生活全体の満足度	0.1120	0.0887	-0.0618	0.2858	1.1185	0.9400	1.3308	0.2068
AIC	3647.5884							
尤度比検定	$\chi^2 = 62.2536 (\rho < .001)$							
*: $\rho < .05$ **: $\rho < .01$ ***: $\rho < .001$								
男性(n=1,352)		偏回帰係数の95%信頼区間			オッズ比の95%信頼区間			p値
変数	偏回帰係数	標準誤差	下限値	上限値	オッズ比	下限値	上限値	
年齢	0.0254	0.0045	0.0165	0.0343	1.0258	1.0116	1.0349	$P < 0.001$ ***
就業状況	-0.0133	0.1581	-0.3232	0.2965	0.9867	0.7239	1.3451	0.9327
婚姻状態	-0.1501	0.1310	-0.4070	0.1067	0.8606	0.6657	1.1126	0.2519
家事の頻度(食事の用意)	0.0494	0.0506	-0.0498	0.1486	1.0506	0.9514	1.1603	0.3292
家事の頻度(食事の後片付け)	0.0301	0.0414	-0.0510	0.1112	1.0305	0.9502	1.1176	0.4674
家事の頻度(食料品や日用品の買い物)	0.2517	0.0541	0.1457	0.3577	1.2862	1.1569	1.4300	$P < 0.001$ ***
あなたと配偶者以外に家事をする人	-0.2775	0.0722	-0.4191	-0.1360	0.7576	0.6577	0.8729	$P < 0.001$ ***
家計の状態	0.2021	0.0773	0.0506	0.3536	1.2240	1.0519	1.4242	0.0089 **
健康状態	-0.0480	0.0616	-0.1687	0.0727	0.9531	0.8447	1.0754	0.4357
生活全体の満足度	-0.2121	0.0914	-0.3913	-0.0330	0.8089	0.6762	0.9676	0.0203 *
AIC	3348.8683							
尤度比検定	$\chi^2 = 107.5359 (\rho < .001)$							
*: $\rho < .05$ **: $\rho < .01$ ***: $\rho < .001$								

4.3 「食の外部化」に関わる意思決定の主体

NFRJ18の質問紙には、「何を食べるか意思決定をする主体」について問う設問は設定されていない。「家庭調理」を担う人物が「何を食べるか意思決定をする主体」と捉えることも可能かもしれないが、外食を含む「食の外部化」の選択には、別の要素が入る可能性もある。そこで、「何を食べるか意思決定をする主体」が比較的判断しやすい「単独世帯者」を対象をしぼり、分析を行った。対象は分析に用いた調査項目について全て回答していた単独世帯者(女性101名、男性135名)である。分析対象者の平均年齢は女性55.2歳、男性51.8歳だったので、表1に示した男女の平均年齢と比較すると女性はやや高齢層が多いと考えられる。

表3 単独世帯者の「食の外部化」の状況を従属変数とする順序ロジスティック回帰分析

女性単独世帯(n=101)		オッズ比の95%信頼区間			
変数	偏回帰係数	オッズ比	下限値	上限値	p値
年齢	0.0532	1.0546	1.0163	1.0944	0.0048 **
就業状況	-0.1739	0.8404	0.3399	2.0781	0.7066
家計の状態	-0.1685	0.8449	0.4621	1.5447	0.5841
健康状態	-0.2030	0.8163	0.5296	1.2581	0.3577
生活全体の満足度	-0.4190	0.6577	0.2642	1.6377	0.3681
AIC	263.6237				
尤度比検定	$\chi^2=18.8474(\rho < .005)$				
*: $\rho < .05$ **: $\rho < .01$ ***: $\rho < .001$					
男性単独世帯(n=135)		オッズ比の95%信頼区間			
変数	偏回帰係数	オッズ比	下限値	上限値	p値
年齢	0.0539	1.0554	1.0306	1.0809	P < 0.001 ***
就業状況	0.1273	1.1358	0.4839	2.6659	0.7699
家計の状態	0.1071	1.1131	0.7400	1.6742	0.6069
健康状態	-0.2431	0.7842	0.5420	1.1345	0.1970
生活全体の満足度	0.1969	1.2176	0.6846	2.1656	0.5028
AIC	359.0784				
尤度比検定	$\chi^2=19.5270(\rho < .005)$				
*: $\rho < .05$ **: $\rho < .01$ ***: $\rho < .001$					

表3は、多重共線性が生じる危険性を回避するために、独立変数をしぼって分析した結果である。偏回帰係数の有意性検定の結果、男女ともに「年齢」($\rho < .001$)のみが統計的に有意だった。そして、「年齢」の偏回帰係数が男女ともに正であることから、高齢の人のほうが「平日の夕食を家族の誰も調理しないこと（外食・出前・市販の弁当・即席食品などですませる）」がない、という結果だった。疑似決定係数（女性：NagelkerkeR² = 0.1833、男性：NagelkerkeR² = 0.1445）は共に低い値だが、モデルに定数項のみを含む場合の-2対数尤度と、モデルに定数項と独立変数を含む場合の-2対数尤度の差を用いた尤度比検定を行った結果、男女ともにこのモデルは有意と考えられる（ $\rho < .005$ ）。

5. 結論及び考察

本研究は、NFRJ18調査の「平日の夕食に家族の誰も調理しないこと（外食・出前・市販の弁当・即席食品などですませる）」という設問から、「食の外部化」状況について先行研究をもとに仮説を立て検証した。

はじめに、「仮説1：就業していることで平日の夕食に家庭調理をしない『食の外部化』頻度が高まる」については、女性のモデルのみ、仮説を支持する結果となった。また、男性は「家計の状態」に「ゆとりがある」と感じている人ほど平日の夕食の家庭調理をしないことが多く、「家庭調理」をしない「積極的選択の側面」の一部が垣間見えた。

次に、「仮説2：年齢が低い人ほど、平日の夕食は家庭調理をしない選択をする頻度が高まる」では、男女ともに若い世代の方が「食の外部化（平日の夕食は外食・出前・市販の弁当・即席食品などですませる）」の選択機会が多いことが推定された。そして、食事をどうするか、自ら決定する機会が多いと考えられる「単独世帯者」に限定して分析した結果、

こちらのモデルも男女ともに「年齢」のみが統計的に有意だったことから、「食の外部化」志向と年齢との関連が改めて浮き彫りになる結果となった。

「仮説 3：自分の健康状態が悪いと捉えている人や生活満足度が低い人ほど、平日の夕食は家庭調理をしない選択をする頻度が高まる」について、先行研究の女性対象調査では明確な関連がなかったとされていたが、本研究では、女性についてのみ「この1年間の健康状態」が「悪い」と感じる人は「平日の夕食を家族の誰も調理しない」頻度が高まる傾向が見られた。しかし、当該項目の男性による回答には統計的関連がなかったため、「家庭調理の担い手」として、男性はあまり役割を果たしていないことが考えられる。また、男性は「生活全体の満足度」が低いと「平日の夕食を家族の誰も調理しない」頻度が高まる状況だった。この結果から、男性は「家庭調理による夕食を望んでいる」ことが推察されるが、「食生活の満足度」と「生活全体の満足度」との関わりが質問紙から判断できないため、この点について再検証する必要がある。

「仮説 4：家事の担い手が自分以外に複数存在する場合は「食の外部化」頻度は低い」では、男性のみ「あなたとあなたの配偶者以外に家事をする人」がいない場合、夕食の中食・外食利用頻度が高まる傾向が見られた。NFRJ18 調査の調査票では「世帯で誰が食事を準備しているか」、「夕食をどうするか」の決定権」に関連する直接的な問いは設定されていないため、「食選択の意思決定の主体」についても検証が必要だと考えられる。

そして、「家庭調理」をしない選択には、先述した積極的／消極的側面があり、これら側面は中食・外食に対する人々の価値観の変化も絡んでいる。畠山は「市販の惣菜や、店屋ものをそのまま家庭の食卓に乗せることは、いかにも手抜きのように気がひける」と捉える人が近年減少傾向にあること（畠山 2016a）や「冷凍食品、レトルト食品、インスタント食品」を「便利」で「おいしい」と思う人が増えたことを指摘している（畠山 2016b）。ここでの畠山の指摘にも表れるように、各食品メーカーの商品開発、あるいはネット上での幅広い情報の授受も相まって「中食」利用の肯定化、という生活価値観の変化が推察される。本研究で得られた「年齢」と「食の外部化」に対する意識の違いは、この「生活価値観」とも大いに関連がある。よって、生活実態と共に、生活価値観について生活文化史の側面から読み解きつつ、「食の外部化」動向の展開を改めて検討したい。

[備考]

NFRJ18 の調査概要の詳細については、第一次報告書を参照されたい。

(<https://nfrj.org/nfrj18publishing.htm>)

[文献]

クリナップ株式会社, 2019, 『キッチン白書 2019』, 1-14.

Cornelisse-Vermaat, J.R. & Ophem, J.A.C., 2013, Outsourcing child care, home cleaning and meal preparation, *International Journal of Consumer Studies*, 37:530-537.

- Craig, L., 2016, Domestic Outsourcing, Housework Time, and Subjective Time Pressure: New Insights From Longitudinal Data, *Journal of Marriage and Family*, 78(5):1224-1236.
- 長谷部杏子・草苺仁, 2007, 「調理技術と食の外部化」『神戸大学農業経済』 39:37-42.
- 畠山洋輔, 2016a, 「食のファーストフード化は進んでいるのか」品田知美編『平成の家族と食』晶文社, 71-77.
- 畠山洋輔, 2016b, 「手抜き化は進展しているのか」品田知美編『平成の家族と食』晶文社, 78-84.
- Hu, Y., 2019, “What About Money? Earnings, Household Financial Organization, and Housework”, *Journal of Marriage and Family*, 81 : 1091-1109.
- 稲葉昭英, 1998 「どんな男性が家事・育児をするのか? —社会階層と男性の家事・育児参加」渡辺秀樹・志田基与師編『1995年SSM調査シリーズ15階層と結婚・家族』1995年SSM調査研究会, 1-42.
- 石田貴士・西山未真・丸山敦史, 2015, 「女性の就業形態が食生活に与える影響」『食と緑の科学』 69:17-23.
- 岩間暁子, 2015, 「就業と家族」『問いから始める家族社会学』有斐閣, 109-135.
- Jenkins, M.& Gerstel, N., 2020, “Work and Family in the Second Decade of the 21st Century”. *Journal of Marriage and Family*, 82:420-453.
- Killewald, A., 2011, “Opening out and buying out: Wives’ earnings and housework time”, *Journal of Marriage and Family*, 73:459-471.
- 岸田典子・佐久間章子・上村芳枝・竹田範子・寺岡千恵子・森脇弘子, 2015, 「女子学生の食行動パターンと生活習慣・健康状況との関連」『日本家政学会誌』 56 (3) , 187-196.
- Kornrich, S.& Roberts, A., 2018, “Spending on Household Services, 1980–2010”, *Journal of Marriage and Family*, 80:150-165.
- Morgan, D., 2011, *Rethinking Family Practice*, Palgrave Macmillan. (=野々山久也・片岡佳美訳, 2017, 『家族実践の社会学——標準モデルの幻想から日常社会の現実へ』北大路書房.)
- 村田ひろ子・政木みき・萩原潤治, 2016, 「調査からみえる日本人の食卓——『食生活に関する世論調査』から(1)」『放送研究と調査』NHK放送文化研究所, 66(10): 54-83.
- 永井恵子, 2016, 「我が国の家事外部化の動向を探る——家計調査結果から見た『家事に関する支出』」『季刊家計経済研究』 109:75-89.
- 農林水産省, 2020, 『令和元年度食料・農業・農村白書』日経印刷, 122-126
- Schulz, F., 2021, “Mothers’, Fathers’ and Siblings’ Housework Time Within Family Households”. *Journal of Marriage and Family*, 83:803-819.
- Shelton, B.A& John, D., 1996, The Division of Household Labor, *Annual Review of Sociology*, 22:299-322.

- 品田知美, 2007, 『家事と家族の日常生活——主婦はなぜ暇にならなかったのか』学文社.
- 総務省統計局, 2018, 『平成 28 年社会生活基本調査 全国・地域生活行動編』日本統計協会.
- 総務省統計局, 2020a, 『家計調査年報（家計収支編）2019 年（令和元年）』日本統計協会.
- 総務省統計局, 2020b, 『家計調査報告 2020 年(令和 2 年) 7 月分新型コロナウイルス感染症により消費行動に大きな影響が見られた主な品目など』
(https://www.stat.go.jp/data/kakei/sokuhou/tsuki/pdf/fies_rfl.pdf) .
- 續順子・市野真理子・松浦星子, 2009, 「勤労男性の健康意識と食事調査(2)——食事摂取状況の解析」『椙山女学園大学研究論集』 40, 115-124.
- 牛窪恵, 2019, 「働く既婚女性の調理外部化に関する一考察」『立教ビジネスデザイン研究』 16:1-14.
- 八木浩平・高橋克也・薬師寺哲郎・伊藤暢宏, 2020, 「多様な中食消費と個人特性, 食品群・栄養素接種の関係——カテゴリカル構造方程式モデリングによる分析」『農林水産政策研究』 32:1-15.
- 八木浩平, 2020, 「我が国の食料消費の将来推計（2019 年版）について——食料支出総額の減少と食の外部化の進展」 *Primaff Review*92:2-3.
- 谷田沢典子・西脇泰子・松永久子・草野愛子, 1985, 「食の外部化に関する研究 第一報 外食の一般的状況」『聖徳学園女子短期大学紀要』 11:55-73.
- 山本淳子・大浦裕二・玉木志穂・八木浩平, 2018, 「女性の就業時間及び子供の存在が食の簡便化に及ぼす影響——Web アンケートの調査結果の分析による」『農業経営研究』 55(3):71-76.
- 渡瀬典子, 2021, 「新聞の連載料理レシピ記事に表れる調理時間の短縮化」, 『生活経営学研究』 56:38-44.

What's for dinner?

A present status on simplification and the outsourcing of meal preparation

Noriko WATASE

Tokyo Gakugei University

This study aimed to examine present status on outsourcing meal preparation and to clarify the characteristic of the factor to affect this choice. The outsourcing of meal preparation is examined by means of the model that incorporates employment, household-economic condition, age, and health condition variables.

Data were sourced from the survey data from the National Family Research of Japan 18 (NFRJ18).

The results showed the following: 1) Women's employment has contributed to the outsourcing of meal preparation. 2) According to ordinal logistic regression analysis of the NFRJ18 data, it became clear that externalization of the dinner went in all generations especially in younger one. 3) Poor health condition promotes the choice on outsourcing meal preparation only for woman.

Finally, it requires further validation to examine the relation between the choice of "avoiding home cooking" and the value consciousness of "home meal replacement and dining out" is concerned.

Key words and phrases: simplification of meal preparation, cooking time reduction, outsourcing intention, home cooking